JICA開発教育コラム

2022年度 VOL.4

JICA開発教育コラム　2022年度 12月号　　発行：JICA地球ひろば

世界って こんなに近いんだ！

～暮らしとつながる開発教育～

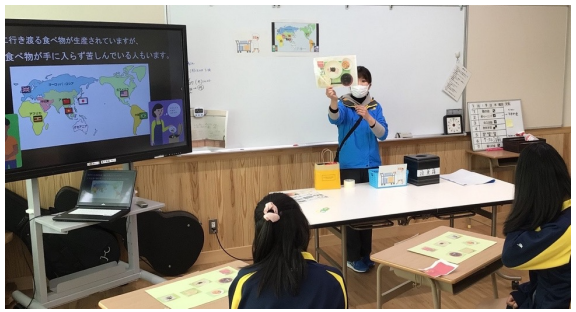
児童生徒が世界の課題を自分ごととして捉えるため、身近な題材での開発教育が多く実践されています。今回は、「世界の現状とフードロスを知ろう！～給食残飯0プロジェクトにチャレンジ！～」をテーマに特別支援学校で授業実践を行った青木先生に、授業のポイントやJICA教材の活用について紹介していただきます。青木先生は2021年度JICA国際理解教育/開発教育指導者研修でこの授業を取り上げました。

＜執筆者＞
埼玉県立戸田かけはし高等特別支援学校　教諭　青木　理紗 先生
（2021年度 国際理解教育/開発教育指導者研修 参加者）

【学習指導案・資料はこちらから閲覧・ダウンロードいただけます！】

- 学習指導案「世界の現状とフードロスを知ろう！～給食残飯0（ゼロ）プロジェクトにチャレンジ！～」
- 授業資料「自分の食生活をふりかえろう」

世界の現状とフードロスを題材にしようと思ったきっかけ、授業をつくる上で工夫したポイント



フードロスは、地球規模かつ生徒たちの身近に起こっている課題です。特別支援学校の生徒たちは障がいの種類や程度により認知面の実態に大きな幅がありますが、「食」は誰でもイメージしやすく、興味関心も高いと考え、この題材を選びました。そしてこの授業のオリジナルプロジェクトとして、生徒たちが給食のフードロスをなくすために自分たちができることを考えて実践する「給食残飯0（ゼロ）プロジェクト」というものを作りました。

生徒たちが大好きな給食を切り口にしてフードロスの問題に触れることで、自分たちの食生活やライフスタイルを見直すきっかけになるといいと思いました。また「残飯0（ゼロ）プロジェクト」に取り組むことで、自分たちの毎日の行動が、食に関する身近な課題に影響を与え、さらには世界にもつながっていることを実感する機会になることを目指しました。授業づくりの際は、障がいの程度に関わらず全ての生徒が理解しやすいように、視覚支援（写真や動画、実物）を多く用いることや、体験型の学習を取り入れるよう工夫しました。発言や話し合い活動の場面では、生徒の自己肯定感を高め、自信を持って取り組めるような言葉かけや雰囲気づくりを常に意識して指導・支援をしました。

JICA教材をこうやって活用しました！

➢ JICA映像教材（タイトルをクリックするとYouTube動画に移ります）

「世界のみんなのごはん」

単元の導入に使用。世界には様々な国があり、食べ物があることを他映像と共に提示しました。

「つながる世界と日本」（上）
「飢餓をゼロに」（下）

世界の食料事情や食糧バランスを考えるワークのまとめで「フードロス」という言葉や内容の理解のために活用しました。

他にも教材研究や教材づくりのために「国際理解教育実践資料集」「世界の食料」「つながる世界と日本」も参考にしました。

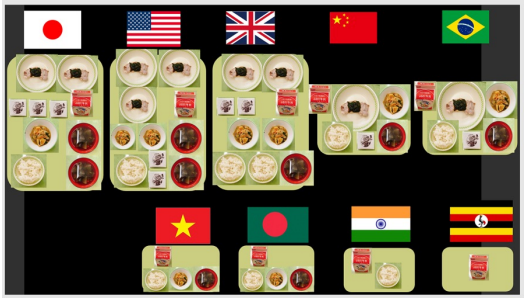
特別支援学校での開発教育については次のページ

JICA 地球ひろば

特別支援学校の多様な生徒に向けた国際理解教育/開発教育で大切にしていること

● 生徒が経験したことのある題材を選ぶ

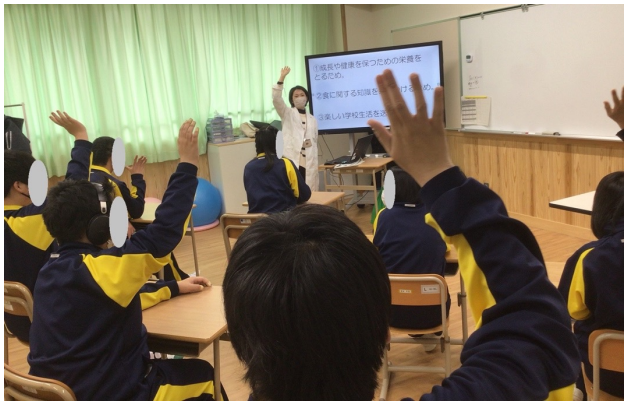
地球規模の課題は、なかなか生徒たちが自ら興味を持つことは難しいテーマだと思います。そのため「衣食住」など、生徒たちが実際に経験したことがある題材を選定することや、興味関心が高まるようにゲームを取り入れるなど、前向きに・積極的に学習に取り組める　環境づくりを大切にしています。



▲世界の国々の食糧バランスを考えるワークで使用した資料。食べきれないほどの量がある国や、足りていない国があることを表しています。

● 教員同士で連携してさまざまな「体験」を！

この実践は、同学年の担任や栄養教諭、調理員にも協力いただきながら進めました。給食の献立に中国やベトナム、ウガンダのメニューを取り入れたり、給食の作られ方や残飯の量の重さを体験したり、ポスター制作のための写真撮影をしたりと、教員同士の連携によって、座学だけではなく体感をしながら学ぶ機会を増やすことを意識しました。特別支援学校という、障がいの程度が幅広い中での実践の難しさも感じましたが、チームティーチングの良さを活かせることは強みでもあります。学級の担任2名で連携をとり、一人ひとりの実態や授業での様子・反応を見ながら、細やかな支援と次時の授業改善をしていくことに努めました。



▲栄養教諭をゲストスピーカーとした授業の様子。「給食は何のためにあるの？」「調理員さんの一日」などをテーマに学習しました。

▲残飯の多さを体験する活動。残飯の代わりに8kg分の米を入れています。

● 自分ごとから世界につなげる流れをつくる

SDGsという言葉やその内容については、学習のまとめとして扱うことで「これまでの自分たちの学習内容や取り組みが、世界全体でも取り組まれている目標の一つだった」という理解につながるよう配慮しました。障壁や障がいのある自分たちも、自ら行動を起こすことで人々の生活をより良くしていける可能性があるんだ、ということに気付いてもらいたいと願っています。

フードロスについて知ってもらい、残飯０を呼びかけるためにポスター制作をし、教室や廊下に掲示しました。またプロジェクト後は、残飯の量が減った結果報告も作成し、掲示しました。▶

「国際理解教育/開発教育指導者研修」が改めてその意義とこれからの取組を考える機会に！

今後継続して開発教育・国際理解教育の授業実践をしていくための足掛かりとして研修に参加しました。講師の先生方の講義や、全国から参加した教員の皆さんの実践発表から様々な題材での実践が知識・技能的に勉強になったことはもちろんのこと、子ども達に向ける皆さんの熱い思いにも大変影響を受けました。全ての生徒にとって、自分の近くの世界から少し広い世界へ目を向ける機会は必要で、改めて開発教育や国際理解教育の意義を考えることができました。今後は、食に関連するところから「エシカルフード」を題材として、地球で起きている環境問題や食料危機などの課題を学ぶ機会を作れたらと考えています！

2023年2月5日(日)に開催する国際理解教育/開発教育指導者研修公開セミナーでは、今年度の参加者の実践発表を聞くことができます！詳細は今後開発教育メルマガにてご案内します。ぜひご参加ください。

青木先生の授業実践では、はじめは外国への関心がほとんどなかった生徒たちが、「通学路にある漢字ばかりのお店は中国の人のお店だったのか」と気づいたり、 外国料理の時事ニュースに関心を示したりと、身近な“世界とのつながり”を積極的に見つけるようになったそうです。開発教育によって「世界ってこんなに近いんだ！」という体験や、気づきの機会をつくっていきたいですね。